

令和7(2025)年度

F D研究部会活動報告書

第17号

徳島文理大学
徳島文理大学短期大学部

巻 頭 言

私たち教員は、学生の成長を願って、将来を良き人間として生きていくための知恵としての学術と社会人として生きていくための知恵としての良識を伝えようとしています。しかし、「学生に伝えようとしたことが伝わっているのだろうか？」と疑問に思ったことはありませんか？ 伝える内容の問題、伝える技術の問題、あるいは、学生側の準備の問題。様々な問題が、発信する側の我々と受け取る側の学生の間には、横たわっています。

米国の大学で Faculty Development(FD)活動は、大学教員の教育能力を高めるという理念で始まりました。日本に導入された FD 活動が授業の点数評価と勘違いされた結果、評価の難しい実験実習や高度な学術内容の講義では、点数が低いという問題が起きました。

徳島文理大学は、学期ごとに授業評価アンケートを実施しています。学生の基礎学力、やる気、興味の濃淡などで授業評価アンケートの評価は大きな差が出ます。しかし、「講義資料の準備」や「分かり易い説明」の項目では、実態を反映した数値がでる傾向があります。教員自身と学生側の授業評価が異なることもあります。しかし、授業評価アンケートによって、教員は、学生が自分の講義をどのように感じていたかを知ることができます。つまり、授業評価アンケートの結果は、別の教員と比較するためのものではなく、同じ授業の年度ごとの教員の学生に伝えようとした内容の学修効果を考えるための参考にするべきものです。

私たち教員は、学生の将来に大きな影響を与えます。クラスごとの講義や実験・実習ばかりではなく、学生一人ひとりの学修目的、学修意欲、学力にあった個別指導も求められています。授業はもちろん重要です。それに加えて、学生と一緒に悩み・迷いながら、入学した学生全員が、笑顔で卒業するまで、学生一人ひとりに寄り添っていただきたいと思います。

副学長 石堂 一巳

目 次

1. はじめに	1
2. F D活動の内容	1
3. 研修会	3
4. 全学授業アンケート	5
5. 研究授業	7
6. 卒業予定者対象・大学生生活満足度アンケート	12
7. 在学生対象・学修状況アンケート	22
8. おわりに	32

1. はじめに

FDは、大学設置基準「(教育内容等の改善のための組織的な研修等)第二十五条の三 大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする」(平成20年4月1日施行)により法的義務となった(短期大学も同様)。本学の「FD研究部会」(以下「部会」)も、平成19年12月、FD活動の推進・研究を目的として設立された。その後、「徳島文理大学教育開発機構設置要綱」(平成29年4月1日施行)にて、「当面する教育上の諸課題又は学長からの諮問事項を研究協議」する「学長直属の教育開発機構」内の組織として、(1)全学教務委員会 (2)入試制度検討部会(入学前教育を含む。)(3)全学共通教育研究部会と並んで(4)FD研究部会と位置付けられた(資料編1頁参照)。

部会の構成員は、各学部から1名ずつ(ただし保健福祉学部は各キャンパスから1名)選出され、学長により任命される。それらのメンバーを中心にFD活動を行ってきた令和7年度の報告書が、本誌、第17号である。

2. FD活動の内容

最初に、令和6年2月15日、本学アカンサスホールで開催された、とくしま産学官連携プラットフォーム・徳島県主催「共同FD・SD 令和5年度地域貢献活動リスタートフォーラム」について触れておきます。基調講演：演題「これからの地域で求められる大学の学びとは」リクルート進学総研所長小林浩氏に続き、学生たちのフィールドワーク活動発表として、本学人間生活学科の学生たちによる「農山村の暮らし体験と地域文化の継承—上勝町におけるローカルSDGsの実践」、四国大学日本文学科の学生たちによる「自分の言葉で伝える文章力講座&フィールドワーク in 神山」、同大学ビジネス・コミュニケーション学科学生による「とくしまの海と山の魅力を海外に発信するフィールドワーク」そして本学食物栄養学科学生による「牟岐町の特産品を活かした地域活性化事業」が発表されました。2月17日には、牟岐町海の総合文化センター大集会室で「牟岐町で活動する大学生・学生・学生団体による活動事例発表会～コロナ禍からの再生、さらなる進化へ～」が同じ主催者で実施されました。

筆者は、令和元年度「FD研究部会活動報告書」にあるように、「学生災害ボランティア入門」という科目を開講し、「学生たちと訪れた被災地は、平成30年8月の西日本豪雨災害で町全体が水没し、犠牲者51人の8割超が1階部分で発見されたという、岡山県倉敷市真備町であった。その後、計3回、徳島県の委託事業として、約40名の学生が真備町で、被災者とともに、写真洗浄のボランティアをすることになった」経験を持っています。

かつて東京大学教育学部長、中央教育審議会委員であり、高等教育研究の第一人者として、その業績は日本のみならず国際的にも高い評価を得られている金子元久先生は、著書『大学の教育力—何を教え、学ぶか』筑摩書房、2007年、38頁に「学習の目標：探求対修得 学習の目標をどこに設定するか・・・大学教育が小中高等学校とは異なるのは、学習のために体系化された知識ではなく、自然や社会、人間のあり方に直接に

対峙する学問に接することを学ぶ点である。したがって、大学教育においては答えのわかっている問題の解き方を教えるのではなく、未知の問題に視野をひろげ、それを探求する姿勢を体得することこそが必要である、という考え方が一方である。・・・しかし他方で、探求は抽象的な概念としてはありえても、具体的に学生自身にとっての学習の目標とはなりにくい。そうした観点からは、とくに個々の授業においては、その授業をつうじて修得すべき目標を明確に設定することが必要だということになる。細々とした知識より、考え方が重要であるというなら、その考え方の修得に何が必要であるかを示せばよい。これを「修得志向」と呼んでおこう。」と指摘されています。

参考にしていただければと思い、紹介しました。

3. 研修会

3-1 現状

本学FD研究部会の取り組みとして、教育に関する研修会の開催がある。これらは、主に「学内研修会」「学外研修会」「新任・昇任教員研修会」の3形態で展開している。

本年度実施した学内でのFD研修会は2回で、下記(1)に示すとおりである。また、新任・昇任教員研修会は、第2～4回は第1・2回FD研修会および(2)の学外研修会を兼ねている。

(1) 学内研修会

第1回FD研修会（SPOD遠隔配信・第4回 新任・昇任教員研修会を兼ねる）

（対象：希望者）

- ・日時：9月10日（水）10:00～12:00
- ・内容：「学生の意欲を引き出す授業とは？」
- ・講師：愛媛大学 真鍋 亮 先生
- ・実施方法：遠隔配信

第2回FD研修会（全学FD研修会・第5回新任・昇任教員研修会を兼ねる）

（対象：全教員）

- ・日時：9月16日（火）～10月31日（金）
- ・演題：「大学の授業設計を極めるーシラバスの役割、作成、そして授業改善への実践ガイドー」（佐藤浩章先生監修の動画）視聴
- ・実施方法：各自でログインし、動画を視聴（所要：60分）する。
- ・視聴後にアンケートに回答する。
- ・受講者：徳島キャンパス 177名、高松駅キャンパス 78名 合計 255名

(2) 学外研修会（SPOD：四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）

第1回FD研修会（第2回新任・昇任教員研修会を兼ねる）（対象：希望者）

- ・日時：6月18日（水）10:00～12:00
- ・演題：「大人数講義法の基本」
- ・講師：上月 翔太（愛媛大学 教育・学生支援機構）
- ・実施方法：対面

第2回FD研修会（SPODフォーラム2025・第3回新任・昇任教員研修会を兼ねる）

（対象：希望者）

- ・日時：8月27日（水）～29日（金）
- ・場所：徳島大学常三島キャンパス
- ・テーマ：学生が安心して学びに向かう基盤づくり
- ・実施方法：対面

(3) 新任・昇任教員研修会

※昇任教員は、助教・講師に昇任された先生の内、研修未受講の先生

- ・研修回数：5回。そのうち4回はFD研修会（学内2回、学外2回）と同時開催。

第1回新任・昇任教員研修会

- ・日 時：4月3日（木）
- ・内 容：学習支援システム Google Classroom を利用した遠隔配信授業について
- ・実施方法：①新任教員には、資料及び参考図書（「いちばんやさしい Google for Education の教本」）を、新任教職員研修会（総務部主催：4月3日（木））にて配付する。
②資料及び参考図書を参考にしながら、各自で研修する。
③希望者は、体験型の研修を受講する。（4月中）

第2回 新任・昇任教員研修会（対象：希望者）

- ・学外の第1回FD研修会と同内容

第3回 新任・昇任教員研修会（SPODフォーラム2025）（対象：希望者）

- ・学外の第2回FD研修会と同内容

第4回新任・昇任教員研修会（SPOD内講師派遣プログラム遠隔配信）（対象：希望者）

- ・学内の第1回FD研修会と同内容

第5回 新任・昇任教員研修会（全学FD研修会）（対象：全教員）

- ・学内の第2回FD研修会と同内容

3-2 点検・評価

ポスト・コロナにより対面とオンラインを適宜組み合わせる研修が定着しつつある。これにより、研修者に多様な研修機会を準備できている。とくに後期の授業が始まるタイミングでシラバスの意義を再確認できる研修内容は、授業改善につながる事が期待される。なお、昨年度は天候のため2回実施にとどまった学内研修会も計画どおり今年度は3回実施することができた。

全教員が受講することになっている学内の第2回FD研修会の受講者数は、

徳島キャンパス	受講者数	177名
高松駅キャンパス	受講者数	78名
合計	受講者数	255名

となっており、受講者は昨年度とほぼ同数であった。各自が都合のつく時間に動画コンテンツを視聴する形式で実施された研修スタイルは、今後も継続すべきであると考えられる。

3-3 改善計画（改善点）

今年度は、年度当初計画どおり、研修を実施することができた。オンラインやオンデマンドによる研修の形式も定着しつつあり、研修に参加しやすい環境となっていることから、今後、より多くの教職員に参加を促していくことが求められる。学外の研修会では、3回のうち1回は対面でのワークショップ・アクティブラーニングを取り入れた研修の機会を提供することができた。次年度以降も継続することが重要であると考えられる。

全学授業アンケート

現状

本学では平成 20 年度以降、授業改善のための基礎資料を収集する目的でアンケート形式により学生の授業評価を実施しており、以下の 2 つの目的に資するデータを得るべく実施している。

- (1) 学生自身の学びの振り返り・自己評価に基づく、学習態度・方法の改善
- (2) 受講生全体の自己評価の確認に基づく、教員の授業内容・方法の改善

平成 25 年度からは、ハイブリッド授業評価アンケート方式を導入した。すなわち、学生による授業評価と、担当教員による評価結果に対するコメントと翌年度授業への対応記載という、学生と担当教員の双方が関与する方式である。令和元年度には、「全学授業アンケート」と名称を変更し、令和 3 年度からは機能拡張を図り、第 1 クォーターや第 3 クォーターの受講学生が、受講期間中にアンケートの回答を実施できるよう「早期モード」機能を追加して継続している。

点検・評価

(1) アンケートの実施状況

アンケートの実施スケジュールは以下のとおりである。

- 前期：学生アンケート 7 月 7 日(月) ～ 8 月 30 日(土)
集計結果の公開 9 月 1 日(月) ～
教員コメント 9 月 1 日(月) ～9 月 30 日(火)
集計結果・教員コメントの公開 10 月 1 日(水)～
- 後期：学生アンケート 1 月 6 日(火) ～ 2 月 6 日(金)
集計結果の公開 2 月 10 日(火) ～
教員コメント 2 月 10 日(火) ～ 3 月 13 日(金)
集計結果・教員コメントの公開 3 月 13 日(金) ～

学生のアンケート対象者数、回答数および回収率を表 1 に示す。

表 1 授業アンケート実施状況（令和 7 年度）

	前期			後期		
	対象数	回答数	回答率(%)	対象数	回答数	回答率(%)
全 体	33,409	23,294	66.7	33,214	20,523	61.8

学生回答率の母数となる『履修登録している学生の総数』について、前期分は令和 7 年 5 月時点、後期分は 12 月時点で教務システムに登録されている履修登録数の総数を母数とした。

また、開講科目の中で受講している学生が5人以上の科目に対して、学生が授業アンケートに回答している科目がどの程度であるかの集計を表2に示す。

表2 授業アンケート回答状況：5人以上の開講科目数（令和7年度）

	前期			後期		
	開講科目数	回答科目数	回答率(%)	開講科目数	回答科目数	回答率(%)
全体	1377	1357	98.55	1432	1388	96.93%

(2) 教員によるフィードバックの状況

フィードバックである教員コメントの記入率は表3に示す。

表3 教員コメントの記入率（令和7年度）

	前期 (%)	後期 (%)
全体	81.1	79.0

教員回答率の母数となる『教員の担当科目数の総数』について、前期分は令和7年5月時点、後期分は12月時点に教務システムに登録されている教員の担当科目数の総数を母数とした。

授業アンケートの集計結果と教員コメントの開示範囲は学内のみとし、開示期間は教員コメント記入期間の約1週間後から1年程度である。

4-3 改善計画（改善点）

今年度の学生対象者数に対する学生回答率は、前期 66.7%（前年度 69.3%）、後期 61.8%（前年度 66.2%）であった。前年度は前期の回答率が後期より上回っていたが、その傾向は今年度も同じである。しかし、前年度に比べて今年度は前期も後期も回答率が下がっている。他方、5人以上の開講科目数の回答率で見ると、前期 98.55%（前年度 99.11%）、後期 96.93%（前年度 97.76%）の高い回答率であった。少人数の科目を除けば、96%以上の高い回答率であることが分かった。

教員のコメントの記入率では、前期 81.1%（前年度 78.7%）、後期 79.0%（前年度 77.5%）であった。前期、後期共に前年度を上回る結果となった。学生への回答は重要であることを各教員が認識し回答率を向上させた結果である。しかしまだ向上を目指す必要がある。非常勤講師への対応などを含め、今後も回答率向上のために具体的な対策を検討していくことが必要と考える。

この「全学授業アンケート」が、学生自身の学習の振り返りと、今後の学習強化ならびに本学の教育の質の向上に寄与できるようにしなければならない。そのために、アンケート回答率のアップを目指し、学生および教員へこれまで以上に徹底した周知を図る必要がある。今後、さらにアンケートの目的を達成するためにも、内容・実施方法等についても議論を重ね、より良いものにしていきたいと考えている。

5. 研究授業

5-1 現状

「研究授業」の実施は、平成 20 年度後期より全学部・学科において実施しており、今年で 18 年目となる。

令和 7 年度、「教員相互による授業参観型」の研究授業は、徳島キャンパスおよび高松駅キャンパスで 19 科目（前期 6 科目、後期 13 科目）実施された。

(1) 目的

「教員相互の授業参観型」は、研究授業開始以降、実施され続けている形である。教員が授業を参観することにより授業改善のために参考になるもの、取り入れられるものを見つけ、自分自身の授業に活かしていくことを目的としている。各教員の教授法の向上と学生の理解力や思考力の向上をめざしており、授業担当者の教授法に対し悪い点を指摘するためのものではない。

「目標設定型」は平成 24 年度より導入している。あらかじめ教授方法や授業運営上の改善点を設定し、定めた期間の中で調査・研究を行うものである。効果的な授業技術の掘り起こしとそれらの共有が主な目的となる。

(2) 実施方法

各学部及び学科は、「教員相互による授業参観型」「目標設定型」のどちらか、もしくは両方の研究授業を選択することができる。年間の実施頻度は各学部及び学科に委ねている。新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行された一昨年度からは、従来通りの「教員相互による授業参観型」「目標設定型」に加え、遠隔配信授業となる状況においてはオンライン研究授業も含め、研究授業を実施するか否かの判断そのものを各学部及び学科に委ねた。

対面による「教員相互による授業参観型」の場合は、学期始めに各学部及び学科の授業担当者と研究授業を補助する授業協力者を定め、授業担当者は研究授業を対象とする科目及び実施日を決める。実施科目と実施日については F D 研究部会が情報をまとめ、事務局が「研究授業予定」一覧表を作成し全学の教員に周知した。

参観範囲は、所属学科に限らずどの科目も参観可能である。研究授業の進行及び記録は授業協力者（あるいは学部、学科の評価・F D 委員会）が行い、原則として 1 講時 30 分の内授業開始から 60 分を授業参観とし、残りの 30 分を授業担当者、授業協力者及び授業参観者による意見交換会の時間とした。ただし、香川薬学部では 1 講時 30 分の講義時間を確保するため、研究授業は 2 講時に実施し、昼休みの時間に意見交換会を行なっている。そのため、講義時間、曜日や教室の変更を教員に依頼することもある。意見交換会では「(1) 目的」にある研究授業の主旨に基づき討議を行った。研究授業実施後は、2 週間以内に別紙の様式（図 1）に授業担当者と授業協力者（あるいは学部、学科の評価・F D 委員会）によって、研究授業記録を作成することとした。研究授業記録は F D 研究部員を通して F D 研究部会へ提出される。

また、コロナ禍になってから実施されているオンライン研究授業は、Google Classroom を用いた研究授業である。事前に周知されている「研究授業予定一覧表」の「教室/クラスコード」にあるクラスコードを使って入り、当日、教員は自由に Google Classroom 上で参観できるようになっている。令和7年度、オンライン研究授業は実施されなかった。

研究授業（教員相互の授業参観）記録			
学 部		学 科	
授 業 者		科 目 名 (シラバス番号)	()
授業協力者		実 施 教 室	
実 施 日 時	平成 年 月 日 曜日 講時		
対 象 学 生		受 講 学 生 数 :	名
目 的 意 義			
授業テーマ			
研究授業内容自己評価			
研究授業参観者の意見・感想			
授業参観教員数	名		

研究授業（目標設定型）記録			
学 部		学 科	
実施代表者			
実 施 期 間	平成 年 月 日 ~ 平成 年 月 日		
目標の説明			
対 象 学 年 または科目		受 講 学 生 数 :	名
具体的な取組み方法			
結果			
協力教員数	名 (内訳)		

図1 研究授業記録様式

5-2 点検・評価

表3に、今年度と過去11年間の学部、学科別の研究授業実施数と参観者数の推移を示した。今年度の年間研究授業実施数は19科目であり、昨年度と同数であった。1科目あたりの参観者数は4～5人程度と、必ずしも多くの教員が参加している状況では無いが、香川薬学部では、前後期とも参加者は20名を超えており、学部内のFD活動として積極的に研究授業に取り組んでいるものと評価できる。「目標設定型」の研究授業は、今年度も実施報告がなかった。

研究授業の実施は、基本的には昨年度と変わらない実施方法、評価方法となった。「教員相互による授業参観型」は昨年度から新型コロナウイルス感染症の5類移行が実施されたことにより、研究授業を再開実施する学科が増えた。しかしながら、国家試験を控える医療系の学部学科を中心として、コロナ禍で中断したのち、現在に至っても研究授業の再開に慎重な姿勢をとるところが依然多かった。

表3 学部、学科別の研究授業実施数と研究授業の参観者数(名)の推移

表3 学部、学科別の研究授業実施数と研究授業の参観者数(名)の推移

年度	平成27 2015		平成28 2016		平成29 2017		平成30 2018		平成31 2019		令和2年 2020		令和3年 2021		令和4年 2022		令和5年 2023		令和6年 2024		令和7年 2025	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
年間研究授業実施数	15	18	10	18	10	16	10	21	7	17	6	5	1	8	4	10	15	11	11	10	6	13
香川薬学	22	18	27	21	20	15	17	8	23	21					9		20	23	20	19	21	25
薬学科		9			7	3												7			6	
日本文学			2			3			3						2							3
英語英文化																						
文化財	5			5						3							4			1		
宿泊セミナー	5,4		4,5		4		5															
学部内合計	14	9	11	5	11	3	5	14	3	3					9	2	4	7	2	1	6	3
機械創造		5		4		3			1													
電子情報		3		6		3		2														
ナノ物質		目標設定型		目標設定型		目標設定型		目標設定型		目標設定型												
学部内合計		8		10		6		2		1		2										
薬学部	未提出	未提出	未実施	4	4	4	8	7	4	11				8								
人間生活	3		3	3	7	7	2		1						4		1	2				2
食物栄養	4	2	1	1	7	7	7,8		3					3		1	2		1			4
心理	2	3	6	3	4	4	1	3	1					6		2	5		7			5
児童	5	1	1	1	4	4	3	3	3					1		2	2		2			6
びん/びん	4	4	1			2	2		4					6		4	4		4			
建築デザイン	3	2	2	2		2			2						2	2	2		2			
学部内合計	17	12	8	10	15	18	1	25	4	10				16	6	7	10	4	10	8	5	17
総合政策学部	5	10		3	3		3	3	2						4		5					
音楽学部	0	2	1	3		6	2			2												
臨床工学		5		3		3				5												
診療放射線				0			0			0												
人間福祉	1		4	4	4	4	3	2	2				1			2	2		3			1
理学療法	1	1	0	1					0													
看護	9	12	7	8	5	5	5	目標設定型	4	5		17	17	10	14		13		8	14	8	15
口腔保健										2												
学部内合計	11	18	11	13	9	12	17	2	4	14	6	19	17	11	4	16	2	13	11	14	8	16
保育		5												7		5	10	8	9		5	5
生活科学		7			1							3				4	5	4		5		3
商科				5					3							4		2		2		4
言語コミュニケーション																5	1			3		
音楽																						
学部内合計		12		5		1			3			3		7		14	16	14		9	10	12
短期大学部	69	89	58	74	62	65	50	75	40	65	6	29	17	42	19	39	57	61	52	52	45	73
前・後期別 参観者数	158		132		127		125		105		35		59		58		118		104		118	
年間参観者総人数	4.6	4.9	5.8	4.1	6.2	4.1	5.0	3.6	5.7	3.8	1.0	5.8	17.0	5.3	4.8	3.9	5.5	4.7	5.2	7.5	5.6	
1科目当たりの参観者数																						

表4には、各学科の授業参観による参観者の意見を一部抜粋したものを示している。各学部及び学科から提出された報告書によれば、依然、従来型の講義形式の授業も多いが、グループ学習を取り入れた講義、受講者が各自ゴーグルを装着して行うVRを使用した講義、グーグルクラスルームを活用し、予習、復習を効率よく実施させるとともに講義を動画で採録し、グーグルクラスルームで公開し復習に役立てる講義など、次第に新たな教育リソースを取り入れた講義が増加傾向にある。しかしながら、これらの取り組みには授業者が受講生のパーソナリティを把握し、的確な指示ができることや、学生の予習に適した教材を作成する必要があるなど、教員の負担が増加する側面もある。

表4 各学科の授業参観による参観者の意見と目標設定型の研究授業の効果

<p>[教員相互による授業参観型] 各学科の授業参観による参観者の意見 研究授業報告書より一部抜粋、● 好意的な意見 ■ 改善を求める意見（なお、全記録はGoogle Classroom資料）</p>
<p>・人間生活学部人間生活学科 ●■学生の主体性を高めるためにも、グループワークなどの活動を実施すると、多様な意見が引き出され、学生の考えを深めることにつながると考えます。</p> <p>・人間生活学部食物栄養学科 ●■本授業では、学生の主体的な学習を促す工夫が見られた。グループ学習に関しては、メンバーの選定をどのような観点で行っているかについて質問があり、学習意欲や理解度を踏まえた編成の重要性について意見が交わされた。動画教材の活用については、理解促進に有用である一方、著作権への配慮も必要であるとの意見があった。</p> <p>・人間生活学部心理学科 ● 導入時に前回の振り返りコメントを丁寧に取り上げていたのが印象的であった。学生の授業への参加意識を高めるのでよいと思った。よい復習の機会となり、理解が深まるように思った。授業の継続性をより意識できると感じた。 ●ニュース映像を使用することにより、社会問題と障害との関連性を深く認識できると感じた。障害者への働き掛けの在り方を映像で伝えることは有効であると感じた。特に障害の態様やその対処方法を障害者自身が語る映像には説得力がある。</p> <p>・短期大学部商科 ●所作やマナーを「行為」として教えるだけでなく、それぞれの目的・意味・気持ちなどを説明することで受講生がしっかりと理解することにつながっていると思った。 ●授業の最初に、音楽を流しながらクイズ（前回の復習）を解いていたが、特に3講時目（午後一番）の授業を始めるには、効果があるのではないかと感嘆した。</p>

・文学部英語英米文化

●受講者が各自ゴーグル装着して行う VR を使った授業を見学するのは初めてだったので、とても新鮮で刺激があった。従来のようにプロジェクターに映すのとは異なる、新しい環境で視聴するという経験を通じて、動画作成のモチベーションがさらに高まるよう設計されていると感じた。

■自分の行うプレゼンテーションの導入的な説明に苦心する学生が散見され、IT スキルを活かすために必要な基礎的能力を伸ばすことの重要性も改めて意識させられた。

・香川薬学部薬学科

●グーグルクラスルームを活用し、確認問題、復習問題に加え、講義の動画を見ることができるようなど、講義構成が工夫され学生の理解を助けるようになっていること。

■丁寧に説明し、熱意も感じられたが、板書だけではなく、教科書、プリントを併用したほうが学生の理解が進むと感じた。（←プリントなどは使用せず、講義に集中させることに重点をおいている。（講義担当者の意見））

5-3 改善計画（改善点）

コロナウィルス感染症などの再燃がない限り引き続き研究授業の実施を継続していきたい。対面で行われる従来通りの形式とオンラインによる実施を併用し、各学科の状況に委ねながら実施していく予定である。

1科目あたりの参観者数は開始当初からは大幅に減少し、ここ数年は4～5人程度で推移している。これは、学部学科によっては担当教員が一巡したことや内容が陳腐化したことが要因であるとも考えられる。しかしながら、近年、大学の教育において学生のアウトプットを伴うアクティブ・ラーニングの取り入れが学生の知識の定着、問題解決能力の醸成に必須であるとされており、本学でもそのような手法を取り入れた講義が増えつつある印象があり、具体的な講義における運用方法について学びたい教員の潜在的要望は高いと考えられる。実際、反転授業やグループ学習を取り入れている授業で研究授業を実施したところ、通常以上の参加者があり、活発な質疑応答が行われた。そこで、アクティブ・ラーニングなどを積極的に取り入れている講義担当者に各学部のFD委員から研究授業を依頼するとともに、他学部・他学科への周知を徹底することにより、研究授業の参加人数の増加を図りたいと考えている。また、教員からのニーズが高まれば、アクティブ・ラーニングを取り入れた講義法に関するワークショップを開催するなど新たなFD活動に繋げることも将来的に考えていきたい。

新任・昇任教員は、FD研修会などで授業方法の研修を受けているが、実践の場として、経験豊かな先任教員からアドバイスを受けられる場として研究授業は重要であり、各学部での新任・昇任教員を対象とした研究授業の積極的な開催を期待したい。

6. 卒業予定者対象・大学生生活満足度アンケート

6-1 現状

本学では、卒業生（正確には、卒業時の学生に対する）を対象とした満足度評価アンケートを平成 21 年度から継続的に実施している。卒業生満足度評価アンケートは、学生が卒業時に、入学時から卒業までの期間における学生生活の振り返りをとおして、学生からの本学の教育に対する評価を受け、教育の充実と改善に資する資料を得ることを目的に行われ、外部への情報発信の役割も併せ持つものである。

徳島文理大学・徳島文理大学短期大学部

2026年3月卒業予定者対象

大学生生活満足度アンケート

本アンケートは、皆さんの学生生活を振り返り、
本学の教育・学生支援のさらなる充実に役立てることを目的としています。

重要 今年卒業（修了）される学生のみが回答対象です。
最終学年以外の方の回答はご遠慮ください。

> この調査は2026年3月に修了される皆様に、本学での学生生活を振り返っていただき、教育内容や施設、学生生活などについての意識を知るためのものです。
> 集計結果は、本学の教育の充実と改善を図るために活用します。
> 大変お手数ですが、以下のアンケートにご協力をお願いいたします。

【重要】回答の扱いについて
回答者の学籍番号は、回答の重複を防ぐためにのみ使用します。
最終的な集計では **誰がどのような回答をしたのかは個人が特定できない形** に加工します。
安心して、率直なご回答をお願いいたします。

【学籍番号】

例：221200

【パスワード】

学生ポータルサイトと同じパスワードです。

ログインしてアンケートに進む >

【回答時の連絡事項】

1. 回答できるのは1回だけです。回答後に回答内容の変更はできません。
2. 自由記述欄への誹謗中傷的な記入はおやめください。そのような記入があった場合には、回答を削除することがあります。

図 6-1 アンケートログイン画面（学生用）

このアンケートの回答画面のスクリーンショットを図 6-2 から図 6-7 に示す。

The screenshot shows a survey interface with a dark red header containing the text "徳島文理大学 卒業生対象・大学生生活満足度アンケート". In the top right corner, there is a status indicator "[] さんログイン中" and a blue link "ログアウト". A light red instruction bar states "各設問に回答の後、ページ下にある「回答内容を確認」ボタンを押してください". Below this is a blue bar with the heading "■ 回答者（あなた）についてお尋ねします". The survey questions are presented in light green boxes:

- Question 1: "性別を教えてください [必須]" with radio button options for "女性", "男性", and "答えたくない".
- Question 2: "現所属学科の在籍年数を教えてください [必須]" with radio button options for "1年", "2年", "3年", "4年", "5年", "6年", "7年", "8年", and "9年以上".
- Question 3: "卒業後の進路（回答時の状態）について教えてください [必須]" with radio button options for "就職", "進学", and "未定".
- Question 4: "あなたの成績について教えてください [必須]" with radio button options for "いちばん多かったのは「優」だと思う", "いちばん多かったのは「良」だと思う", and "いちばん多かったのは「可」だと思う".

図 6-2 アンケート回答画面 (1/6)

■ 授業・教育課程についてお尋ねします（全体として）

授業科目は充実していましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

授業や実習内容はわかりやすかったですか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

専門的な知識や技能（免許・資格を含む）を修得できましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

教育に対する熱意は感じられましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

授業以外の指導（学外実習、見学、補習など）は充実していましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

図 6-3 アンケート回答画面（2/6）

課題（宿題やレポートなど）の量は適切でしたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

授業や教育課程を通じて、自分の成長を実感できましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

■ 大学の設備および支援体制についてお尋ねします（全体として）

就職や進路についての相談・支援は役に立ちましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

高松駅キャンパスの図書館は利用しやすかったですか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

授業や実験・実習に必要な設備は整っていましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

図 6-4 アンケート回答画面 (3/6)

高松駅キャンパスの食堂やコンビニに満足していましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

困ったことがあった場合、相談できる体制は整っていましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

■ キャンプスライフについてお尋ねします

高松駅キャンパスは清潔でしたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

クラブやサークル活動は参加しやすかったですか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

頼りになる教員に出会えましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

図 6-5 アンケート回答画面 (4/6)

よき友と出会えましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

■ 総合評価をお尋ねします

入学時の夢をかなえることができましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

本学での学びは、自分の将来に役立つと感じていますか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

知り合いの高校生に本学への進学を勧めたいと思いますか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

総合的にみて、本学での学生生活はよかったですか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

図 6-6 アンケート回答画面 (5/6)

本学で良かった点（カリキュラム、設備、お世話になった教員・スタッフ名など）を具体的にお書きください（2000字以内）

《できるだけ記入してください》

ご要望・ご意見・改善案などをお書きください（2000字以内）

《できるだけ記入してください》

回答内容を確認 >

©徳島文理大学・徳島文理大学短期大学部

図 6-7 アンケート回答画面（6/6）

令和 7 年 12 月度の定例合同教授会において、これまでと同様に卒業予定者に対して大学生生活の満足度アンケートを実施することを告知し、同時に回答用のシステムをスタンバイさせた。回答の開始日については各学部・学科に委ねることとし、回答終了日については 2026 年 4 月 7 日までとした。回答者に該当する学生に対しては、各学部・学科の担当教員やチュータから適宜回答を依頼した。このとき、回答状況がブラウザ上からリアルタイムでわかるようにしている（図 6-8）。このシステムは各学科（部局）の回答者数を閲覧することができ、さらに回答数のところをクリックすると回答を済ませた学籍番号のリスト一覧が閲覧できるようになっている。ただし、アンケートの回答内容は表示されない。

今年度は、質問項目を一部変更した。昨年度と比較した場合、「学内の PC や Wi-Fi サービスは利用しやすかったですか」という質問項目を削除、「食堂や売店・コンビニに満足していましたか」を「●●キャンパスの食堂やコンビニに満足していましたか」に変更、「図書館は利用しやすかったですか」と「キャンパスは清潔でしたか」を「●●キャンパスの図書館は利用しやすかったですか」と「●●キャンパスは清潔でしたか」に変更、「本学の学びは、自分の将来に役立つと感じますか」という質問項目を新規に追加した。ここで、●●には回答者の所属するキャンパスに応じて「徳島」か「高松駅」が表示されるようにしている。

卒業予定者対象・大学生生活満足度アンケート（回答状況）

各所属の回答者数をクリックすると回答済みの学籍番号一覧が表示されます

所属名	回答者数
《大学院》薬学研究科薬学専攻博士課程	1
《大学院》文学研究科博士前期課程	0
《大学院》文学研究科博士後期課程	0
《大学院》工学研究科システム制御工学専攻博士前期課程	6
《大学院》工学研究科ナノ物質工学専攻博士前期課程	1
《大学院》工学研究科システム制御工学専攻博士後期課程	0
《大学院》工学研究科ナノ物質工学専攻博士後期課程	0
《大学院》人間生活学研究科食物学専攻博士前期課程	0
《大学院》人間生活学研究科生活環境情報学専攻博士前期課程	0
《大学院》人間生活学研究科児童学専攻博士前期課程	0
《大学院》人間生活学研究科心理学専攻博士前期課程	0

図 6-8 学科別（部局別）回答状況確認システム

アンケート結果は、全体、学部別に集計し図表に整理した。これらは実施年度の翌年度のはやい時期に定例合同教授会で報告される。また、記入された自由記述欄の内容については一覧にまとめられて部局長会で報告している。

アンケートはインターネットに接続している PC やスマートフォンのブラウザを利用して回答される。このアンケートのログイン画面の URL は

<http://sd.bunri-u.ac.jp/enq/>

である。

6-2 点検・評価

今年度の対象者数は 887 人であった。このうち 703 人から回答を得ることができた。回答率は 79.3%であった。これは、前年度（85.1%）より低下したが、多くの学生から回答が得られていると判断している。所属別の内訳は表 6-2 に示す通りである。

全学全体の集計結果を概観すると、最も高得点は、IV-1 の「キャンパスは清潔でしたか」（4.57 点）であった。これは、昨年度は 2 番目に高い値であった。高くなった理由としては今年度から志度キャンパスから高松駅キャンパスに移転したことが影響し

ていると考えられる。次に高得点は、昨年度に最も高得点であったⅣ-4の「よき友と出会えましたか」(4.56点)であった。数値的には昨年度とほぼ同じである。3番目に高いスコアであったものは、今年度から新しく追加した「本学での学びは、自分の将来に役立つと感じていますか」(4.49点)であった。本学での学びが将来に役立つと感じている学生の割合は想定以上に高く、本学の教育内容が学生にとって意味のあるものとして認識されていることが示唆される。一方で、本設問は主観的評価であり、卒業時の心理的要因の影響も考えられるため、専門知識の修得実感や総合満足度との関連を踏まえた分析が必要である。引き続き高いスコアの質問項目は、Ⅳ-3「頼りになる教員に出会えましたか」(4.41点)、Ⅱ-3「専門的な知識や技能(免許・資格を含む)を修得できましたか」(4.40点)、Ⅲ-3「授業や実験・実習に必要な設備は整っていましたか」であった。これらは例年と同様に高く評価されていることがわかる。

表 6-2 所属別アンケート回答状況

所属名	卒業者数	回答者数	回答率(%)
人間生活学部	254	208	81.9
音楽学部	10	9	90.0
薬学部	43	21	48.8
文学部	54	51	94.4
理工学部	85	61	71.8
総合政策学部	70	52	74.3
香川薬学部	24	16	66.7
保健福祉学部	268	239	89.2
短期大学部	43	36	83.7
大学院・専攻科	37	10	27.0
全体	887	703	79.3

しかしながら、最も低い得点は、Ⅳ-2の「クラブやサークル活動は参加しやすかったですか」(3.53点)であった。クラブやサークル活動に関する評価が相対的に低い結果となった。この背景としては、学生の活動スタイルの多様化や課外活動への関与の変化など、複数の要因が考えられる。今後は、学生のニーズや実態を把握した上で、課外活動の在り方について検討する必要がある。2番目に低い得点は、Ⅴ-3の「知り合いの高校生に本学への進学を勧めたいと思いますか」(3.84点)であった。「知り合いに本学を勧めたいか」という項目は相対的に低い値を示したが、「そう思う」「ややそう思う」を合わせると一定の割合を占めている。一方で、他項目と比較すると改善の余地がある指標であり、本学の魅力の発信や学生満足度の向上に向けた取り組みが求められる。

これらの低得点項目は、入試広報委員会や保健管理センター、教務委員会など他委員会や組織体との連携によって改善に資するものと考えられる。卒業生向けの大学生生活満足度アンケートは、FD 研究部会の活動として実施しているものであるが、『FD 研究部

会活動報告書』(冊子体)を全教員に配布しているため、教職員が一丸となって学生の満足度が高くなるよう、今後、各種関連委員会や組織体との連携強化が課題となる。

なお、資料編に、学部全体、短期大学部全体、各学部に分けて数値とグラフを示しているのご高覧頂きたい。

6-3 改善計画(改善点)

(1) 質問項目の検討

このアンケートを始めた当初は、マークシートを利用して限られた時間内で回答する必要があったため、質問項目はできるだけ少なく厳選した。しかしながら、近年の社会環境の変化に伴い、学生がスマートフォンなどの情報端末でアンケートに回答することに抵抗がなくなってきたと感じている。これを鑑みると、質問項目を少しだけ増やしても実施上の問題はないのではないだろうか。また、昨年度から開始した在学生全員に実施する学修状況アンケートの質問項目と意図が近いものがいくつか存在するので、学修状況アンケートとの整合性を検討する必要がある。徳島文理大学の学生の満足度向上に資する具体的な示唆が得られるよう、質問項目の精査および追加について部会において検討を進める。

(2) 大学生生活満足度アンケート結果を教育環境や教育改善に活かすシステム構築

これまで平成21年度～令和7年度の16年間に渡り、卒業生に対する満足度アンケートを行い、その結果をもとに、改善計画(改善点)をたて、満足度評価の方法論やシステムについて改善を行ってきた。そのことにより、教育環境や教育活動が少しずつ改善されてきているが、まだ十分とはいえない。

多大な費用とエネルギーを費やし実施してきた満足度評価アンケートから教育環境や教育改善に活かす事項が見出されたならば、今後は、その結果を活かすシステムの構築が課題となってくる。卒業生の満足度・不満足度を明らかにする単なるアンケートで終わっては意味がない。今後は、評価結果を活かして機能していくように、例えば、他委員会や組織体との情報共有や連携・協働など教育環境や教育改善に活かすシステム(仕組み)を構築していく時期にきている。

7. 学修状況アンケート（在学生対象）

7-1 現状

本学では、これまでにすべての学生に対して受講した授業の「全学授業アンケート」を、さらに、卒業予定者に対して「大学生生活満足度アンケート」を実施してきた。前者は、授業という比較的狭い範囲に限定した実態調査であり、後者は、授業だけに限らない本学で体験できる比較的広い範囲のものである。これらの集計結果が、本学が学生に提供する様々なサービスの改善に役立ってきたことは自明である。

一方、以前より大学生生活満足度アンケートを卒業予定者に限定せず、在学生に対しても実施してはどうかという意見があった。卒業予定者の場合には、2～6年という比較的長い期間に対する実態調査のため、回答の信頼性に若干の課題（平滑化や時間的なズレ）がある。寄せられた意見の多くは、この課題を解決するために在学生に毎年同様の実態調査を実施することが望ましいというものである。さらに、次回の外部認証評価では、エビデンスに基づいた内部質保証についての評価をしなければならない。内部質保証については授業アンケートだけでなく、広い範囲の学びに関するサービスの実態調査が必要である。以上のことから、係るコストのことを勘案しても、実施する方が本学にとって得策だと判断できるので、全学生を対象とした学習状況を把握するためのアンケートを2021年度から実施することにした。ただし、2021年度は試行とし、2022年度から本稼働とした。今年度は本稼働4年目である。

[主たる目的]

- (1) 本学の学生が、一年間に本学で体験した学修活動全般（授業や課外活動など）に関する実態を調査する
- (2) 学生の学力や満足度の向上に寄与する要因を探る

実施方法は、インターネットを利用して回答する他アンケートと同様とし、回答期間は、2026年1月10日から2026年4月8日までとした。今年度の対象者数は3,765人であり、このうち回答したのは1,813人であった。回答率は48.2%である。これは昨年度の52.2%よりは低下した。

質問項目は「Ⅰ. 回答者について」、「Ⅱ. 授業・教育課程・学修環境」、「Ⅲ. 総合評価」という3つの大分類に分けられている。さらに、Ⅰについては11項目（昨年度は12項目）、Ⅱについては10項目（昨年度は7項目）、Ⅲについては2項目、Ⅳについては2項目を設けている。質問項目は前年度のものと同じではなく、一部変更している。

このアンケートに対して学生は各自のスマートフォン、あるいは大学及び個人のPCのブラウザ上で回答することができる。図7-1にアンケートシステムのログイン画面を、図7-2から図7-6に質問項目（回答画面）を示す。図7-7には、学生用の回答閲覧サイトのトップページ画面を示す。



図 7-1 アンケートログイン画面（学生用）

学修状況アンケート

[235200] さんログイン中
[ログアウト](#)

回答者（あなた）についてお尋ねします

現所属学科の在籍年数を教えてください [必須]

- 1年
- 2年
- 3年
- 4年
- 5年
- 6年
- 7年以上

いま、あなたが大学でやりたいことをすべて選択してください [複数選択可]

- 専門的な勉強
- 基礎的な勉強（語学やプレゼンスキルなど）
- 最先端の研究
- 資格や免許の取得
- 社会貢献（ボランティアなど）
- 自由な時間を楽しむ（旅行や読書、芸術活動など）
- 学友との交流（サークル活動を含む）
- 起業などのビジネス
- スポーツやトレーニング

その他： (15文字以内)

この一年間、授業時間を除く一日あたりの平均的な学習時間を選択してください [必須]

- 30分未満
- 30分～1時間
- 1時間～2時間
- 2時間～3時間
- 3時間以上

先ほどの平均的な学習時間は昨年と比較してどうですか [必須]

- 増加した
- 変わらない
- 減少した

いま、あなたの卒業後の具体的な目標（夢）が言えますか [必須]

- 言える
- 言えない

図 7-2 アンケート回答画面 (1/5)

この一年間、学修に対するモチベーション（学修意欲）はありましたか [必須]

- あった
- どちらかといえばあった
- どちらかといえばなかった
- なかった

学内に気軽に相談できる友人や教職員がいますか [必須]

- いる
- いない

この一年間、大学で授業を受けたくないと思ったことがありましたか [必須]

- あった
- なかった

この一年間、将来のあなたに役立ちそうな何か新しい挑戦をしましたか [必須]

- 新しい挑戦をした
- 新しい挑戦をしていない

あなたはストレスに強いですか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

あなたは自分をコントロールするよりも、信頼できる誰かにコントロールされる方がいい [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

図 7-3 アンケート回答画面 (2/5)

授業・教育課程・学習環境についてお尋ねします（全体として）

この一年間に受講した授業科目数は多いと感じましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

この一年間に受講した授業内容はむずかしいと感じましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

この一年間に受講した授業は興味深い（有益と感じられた）ものでしたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

あなたは授業でわからないことや宿題などをひとりで学修することができますか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

あなたは集団で学修するより、ひとりで学修する方が好きですか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

この一年間、教員または職員と個人的な面談をしたことがありますか [必須]

- したことがある
- したことがない

図 7-4 アンケート回答画面 (3/5)

この一年間、大学生活や授業の中で、不快に感じるような言動を受けたことがありますか [必須]

- 受けたことがある
- 受けたことがない

この一年間、授業以外の学習活動（講演会、補習など）に自主的に参加しましたか [必須]

- 参加した
- 参加していない

この一年間、（授業の）課題のために図書館を利用したことがありますか [必須]

- 利用したことがある
- 利用したことがない

この一年間、定期的に学内のサークル活動に参加しましたか [必須]

- 参加した
- 参加していない

総合評価をお尋ねします

この一年間に本学で体験したこと（学修や課外活動など）に満足しましたか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

この一年間であなたは自分自身の成長を感じていますか [必須]

- そう思う
- ややそう思う
- どちらでもない
- あまりそう思わない
- そう思わない

図 7-5 アンケート回答画面（4/5）

この一年間にあなたが本学で体験したもっとも印象に残ったことをお書きください（1200字以内）

《できるだけ記入してください。お願いします》

本学をより魅力的にするために取り組むべきことがあれば提案してください（1200字以内）

《できるだけ記入してください。お願いします》

回答内容を確認 >

©徳島文理大学・徳島文理大学短期大学部

図 7-6 アンケート回答画面（5/5）

学生は、在学中に自分が回答した内容を閲覧できる。また、本学の教職員は、全学生の回答状況を閲覧することができるようにしている。これにより、本人のリフレクション活動だけでなく、担任やチュータなど教職員も適切に学修および生活指導をすることができるようになっている。

学修状況アンケートの回答閲覧

学籍番号：225207

学生氏名：上平 舜之佑

2025年度 <回答済>

2024年度 <回答済>

2023年度 <回答済>

2022年度 <回答済>

2021年度 <未回答>

< 前の画面に戻る

©徳島文理大学・徳島文理大学短期大学部

図 7-7 アンケート回答画面（5/5）

学修状況アンケート（回答状況）

■■■■ 現時点での回答数は 1,873 / 3,798（回答率：49.3%）です ■■■■
 （在籍数は2025年12月19日時点のデータです）

ID	学部名	学科名	対象数	回答数	回答率(%)
0A	その他	科目等履修生	8		0.00
0B	その他	社会人特別聴講生	11		0.00
0K	その他	交換留学生（香川）	3	2	66.67
0T	その他	交換留学生（徳島）	11	1	9.09
1H	薬学部	薬学科	334	232	69.46
1I	薬学研究科	薬学専攻博士課程	10	1	10.00
2D	工学研究科	システム制御工学専攻博士前期課程	13	1	7.69
2G	工学研究科	ナノ物質工学専攻博士前期課程	6		0.00
2H	工学研究科	ナノ物質工学専攻博士後期課程	1		0.00
4A	文学部	日本文学科	107	83	77.57
4D	文学部	文化財学科	104	75	72.12
4H	文学部	英語英米文化学科	73	37	50.68
5G	音楽専攻科	器楽専攻	2	2	100.00

図 7-8 学科別（部局別）回答状況確認システム

回答期間中は、回答状況がリアルタイムでわかるように、図 7-8 に示すインターネット上で稼動するシステムを構築している。このシステムは各学科（部局）の回答者数を閲覧することができ、さらに回答数のところをクリックすると回答を済ませた学籍番号のリスト一覧が閲覧できるようになっている。ただし、アンケートの回答内容は閲覧できない。

このアンケートの学生用の回答用 URL は、

<https://bunri-u.org/as/>

であり、教員用の回答状況確認用 URL は、

<https://bunri-u.org/as/teacher/>

である。

教職員が、学生の回答状況を閲覧するためには、教職員コードによるログインが求められる。

7-2 点検・評価

ここでは集計結果の概要について述べる。大学でやりたいことをすべて選択させる問い（I-1）については、選択率の高い順に「専門的な勉強」（87%）、「資格や免許の

取得」(74%)、「自由な時間を楽しむ(旅行や読書、芸術活動など)」(52%)であった。この状況は5年連続で同じである。選択率もほぼ同じであった。他の質問項目についてもほぼ例年と同水準であった。

着目すべき点としては、昨年度に新規に追加した質問項目の変化と今年度で新規に追加した質問項目が挙げられる。昨年度に追加した「あなたは自分をコントロールするよりも、信頼できる誰かにコントロールされる方がいい」については、「そう思う」と「ややそう思う」が33%であった。これは昨年度と同率である。2年間の結果ではあるが、同様の傾向が継続して確認されており、一定の傾向として捉えることができる可能性がある。ただし、引き続き経年的なデータの蓄積と検証が必要である。「あなたは集団で学修するより、ひとりで学修する方が好きですか」という問いについては、「そう思う」と「ややそう思う」と回答した人が58%と、昨年の41%から大きく増加した。昨年度と比較して大きく増加していることから、学修スタイルの変化が生じている可能性が示唆される。背景要因については、今後の調査・分析が必要である。

新規に追加した質問項目として、「この一年間、大学生活や授業の中で、不快に感じるような言動を受けたことがありますか」がある。「受けたことがある」と「受けたことがない」という二者択一での回答であるが、受けたことがあると回答した人が13%であった。本項目については基準となる比較データがないため単純な評価は難しいが、一定数の学生が不快な経験をしていることは看過できない。理想的には0%を目指すべき指標であり、継続的な状況把握とともに、予防および対応体制の強化が求められる。

総合評価に関する項目はいずれも高い水準を維持しており、これまでの教育改善の取組が一定の成果を上げている可能性が示唆される。一方で、要因の特定にはさらなる分析が必要である。

7-3 改善計画(改善点)

(1) 質問項目の検討

学修状況アンケートを本格的に実施してから4年が経過した。これにより、アンケート結果を時系列に比較することで学生の学修状況の変化(とりわけ成長過程)を観察することができるようになった。大学全体に関しては前述のとおりであるが、部局別の集計表を利用すれば、各部局における学生の学修状況の全体像を把握することができるようになった。

今年度の実施分については、1つの質問項目を追加、1つの質問項目を削除した。学修設備などに関する質問は毎年実施する必要はないと考えているからである。各授業については授業アンケートが存在していることを踏まえれば、学修状況アンケートは、学生の内面的な態度や学修行動を把握するための重要なツールとして位置づけられるべきであり、その目的に沿った質問項目の精査および見直しを継続的に行う必要がある。

(2) 回答率の向上

授業アンケートと比べるとこのアンケートの回答率は低い。本アンケートの活用目的を踏まえると、より高い回答率の確保が重要である。将来的には、このアンケートで退学防止などにも役立てることを目指しているため、回答率が高いほうが好ましい。授業

アンケートであれば、担当教員が授業などで直接依頼をかけることができるが、このアンケートでは同様な依頼ができないため、現状では電子メールでの告知（依頼）が唯一の手段である。また、実施期間が後期の授業アンケートや卒業生対象の大学生生活満足度アンケートと重複したために、学生に少なからず混乱を招いた可能性がある。次年度以降も、回答率を向上させる方法を検討する必要がある。なお、今年度の部局別の回答状況を表 7-1 に示す。

(3) 回答情報の活用

先述の通り、今年度から各学生がどのように回答したのかを教職員が学修指導目的で閲覧することができるようになった。現状では単年度別の回答を閲覧できるが前年度の変化などを視覚的に把握できない。また、学生自身が過去にどのように回答したのかを閲覧できない。過去の回答を閲覧できれば、みずからの成長を実感したり、自省したりできるので、こういう機能の実装が求められる。これらのことについて次年度以降のFD 研究部会で議論を重ね、回答情報を学生の学修活動にうまく活かす方法を探っていく必要がある。

表 7-1 所属別アンケート回答状況（令和 7 年 4 月 13 日時点）

所属名	在籍数	回答者数	回答率(%)
人間生活学部	907	453	49.9
音楽学部	34	17	50.0
薬学部	334	231	69.2
文学部	284	195	68.7
理工学部	319	204	63.9
総合政策学部	378	44	11.6
香川薬学部	244	111	45.5
保健福祉学部	1,081	463	42.8
短期大学部	105	87	82.9
大学院・専攻科他	79	5	6.3
全体	3,765	1,813	48.2

8. おわりに

本学では、幼稚園・小学校・中学校・高等学校の教諭を目指す学生たちが、たくさん学んでいる。そして、教育実習に行くことになるのだが、限られた期間ではあっても授業担当を経験することになる。

同様に、看護師・薬剤師・理学療法士などの資格取得を目指す学生たちも、職場体験で「ヒヤリ・ハット」の事例報告の書き方などを教え込まれることになる。

FDにも不可欠である『事例報告』は、新規に参入する指導補助者などに対する研修に有用であるだけでなく、教育実践者一人一人の常なる学習となる。

指摘するまでもないが、本学で学ぶ全ての学生たちが、どんな職場に入るとしても、いずれ、「報告」「連絡」の毎日を過ごすことになる。さらには、一番難しいとされる「相談」の受け手にいつかは成長してもらいたいと、学生からいろんな相談を受けてきた教職員みんなが願っている。

本年度も、こうした願いを込めたFD活動報告書をお届けできることに感謝したい。